

おじいさんの家

小川未明

青空文庫

学校から帰ると正雄は、ボンと楽しく遊びました。ボンはりこうな犬で、なんでも正雄のいうことはよく聞き分けました。ただものがいえないばかりでありましたから、正雄の姉さんも、お母さんも、みんながボンをかわいがりしました。

ただ一つ困ることは、日が暮れてから、ボンがほえることでもあります。しかしこれは犬の役目で、夜中になにか足音がすればほえるのに不思議なことはありませんけれど、あまりよくほえますので近所で迷惑することもあります。

「ボン、なぜそんなにおまえはほえるのだ。もう今夜からほえてはならんよ、ご近所で眠れないとおっしゃるじゃないか。」と、正雄のお母さんがおしかりになると、ボンは尾を振って、じつとりこうそうな目つきをして顔を見上げていましたが、やはり、夜になると、家の前を通る人の足音や、遠くの物音などを聞きつけて、あいかわらずほえたのであります。

正雄は、床の中で目をさまして、またボンがほえているが、近所で迷惑しているだ

ろう。どうしたらいいかと心配しんぱいしました。正雄まさおは起きて戸口とぐちに出てボンを呼びました。するとボンは喜んですぐようこに走はしつてきました。思いがけなく夜中よなかの寂さびしいときに呼よばれたので、ボンはうれしさのあまり、正雄まさおに飛とびついて、ほおをなめたり、手てをなめたりして喜よろこんだのであります。

「ボンや、あんまりほえると、また、いつかのようにひどいめにあわされるから、黙だまっているんだぞ。夜よが明あけたらいつしよに散歩さんぽにゆくから、おとなしくしておれ。」と、正雄まさおはボンの頭あたまをなでながらよくいいきかせました。そうしてまた、正雄まさおは床とこの中なかに入はいつて眠ねむりました。

その後あとでも、おそらくボンはほえたかしれません。けれど正雄まさおはよく眠ねむつてしまいましたから、なにごとしも知らなかつたのであります。

朝あさ起きると正雄まさおは、戸口とぐちに出でてボンを呼よびました。ボンは、さっそくそばにやってきましたけれど、どうしたにかいつものように元氣げんきがなかつたのであります。

ボンは病氣びようきにかかっているように見みえました。正雄まさおを見みますと、いつものように尾おを振りふりましたけれど、すぐにぐたりとなつて地面じめんに腹はらばいになつてしまいました。そうして、苦しくるそうな息いきづかいをしていました。口笛くちふえを吹ふきましても、ついてくる氣力きりよくがもうボ

ンにはなかつたのであります。

正雄まさおは驚おどろいて、家うちの中なかへ入はいって、

「ボンが病びよう気きですよ。」と、お母かあさんや、姉ねえさんに告つげました。

そこで、みんなが外そとに出でてみますと、ボンは脇わき腹はらのあたりをせわしそうに波なみだ立たて、苦くるしい息いきをしていました。そうして、もう呼よんでも、起おき上あがって尾おを振ふることもできなかつたのであります。

「あんまり、おまえがほえるものだから、だれかに悪いものを食たべさせられたのだよ。」と、お母かあさんは、ボンの頭あたまをなでて、いたわりながらいわれました。

姉ねえさんは、ボンの苦くるしむのを見みてかわいそうに思おもって、さつそく獣じゆう医いのもとへボンを車くるまに乗のせて連れていこうといいました。お母かあさんもそれがいいというので、正雄まさおは車くるまを迎むかえにゆきました。そのうち車くるまがきましたので、ボンを乗のせて、姉ねえさんと正雄まさおはついてゆきました。

獣じゆう医いのもとへいつてみますと、ほかにもたくさんの、病びよう気きの犬いぬや猫ねこが入い院いんしていました。ほかの病びよう気きの犬いぬは、檻おりの中なかから、くびをかしげて、新あらたにきた患かん者じやをながめていました。獣じゆう医いはさつそくボンの診しん察さつにかかりました。

診察の結果は、お母さんのいわれたとおり、だれかに毒の入った食物をたべさせられたのだろうということでした。医者はボンの体を子細に調べていましたが、後足についている傷痕を指さして、

「この傷は、いつつけたのですか。」と聞きました。

「その傷は二、三か月前に、やはりだれかにいじめられてつけたのでございます。なしろ、夜になるとよくほえますので、近所から憎まれていますもんですから。」と、姉さんは答えました。

ボンの後足には、かなり大きな傷がついていました。

「ボンは助かりましたようか。」と、正雄は心配しながら獣医に聞きました。

「さあ手を尽くしてみますが、そのへんのことはわかりかねます。」と、不安な顔つきをして獣医は答えました。

そのうちにボンは、しだいに気力が衰えてゆきました。正雄や、姉さんがその名を呼びましたけれど、しまいには、まったくその声がボンには聞こえないようになりました。そうして、薬をのましたり、手当をしたりしたかきもなく、とうとうボンは目を閉じたまま死んでしまいました。

正雄まさおは悲かなしみました。姉ねえさんも目めをしめらして悲かなしみました。そうして、ボンくるまをまた車くるまに乗のせて家うちへ帰かえりました。ボンかえが死しんだということきを聞きかれて、お母かあんも悲かなしまれました。

二

みんなは相談そうだんをして、ボンかえをていねいにお寺てらの墓ぼち地ほうむへ葬ほうむりました。そうして、坊ぼうさんさんに頼たのんでお経きやうを讀よんでやりました。その当座とうざ、正雄まさおはボンかえがいなくなつたのできびしくてなりませんでした。朝あさ起きても、学がっこう校かえから帰かえつてきても、飛とびついて自分じぶんを迎むかえてくれるものがなくなり、またいっしょに散歩さんぽをするものがなくなつたと思おもうと、いままでのよたのうに樂たのしみがなかつたのであります。

こうして、はや幾いくにち日ちかたつてしまいました。正雄まさおは、ボンかえのことをいままでほど思おもい出ださなくなりました。

ある日ひのこと、戸口とぐちから尾おを振ふりながら入はいつてきた犬いぬがあります。なんの気きなしに、その犬いぬを見みますと、正雄まさおは驚おどろいて声こゑをあげました。

「あ、ボンかえが帰かえつてきた。ボンかえが帰かえつてきた。」

と、つづけざまにいいましたので、みんなはびつくりして、そのほうを見ますと、なるほど、ボンが帰ってきたのでありました。

「どうしてボンが帰ってきたろう。」と、お母さんは不思議がられました。

「死んだボンが、どうして生きてきたのでしょうかね。」と、姉さんもびつくりしていいました。

正雄は、すぐさま戸口に走り出て、ボンを見ようとしました。ボンは喜んで正雄の足もとにすりよつてきました。正雄は夢中になって、ボンの頭や脊中をなでたのであります。「しかし、死んだ犬が、生きてくるはずがないですねえ、お母さん。」と、姉さんはいいました。

「私もそう思うよ。ああして死んでお寺に埋めてしまったのじゃないか。それがどうして生きてきたんでしよう。」と、お母さんも不思議がつていられました。

けれど、その形から、毛の色から、どこまでもボンと変わりありませんでした。正雄は、たしかにボンが帰ってきたのだと思いましたが、

「だって、ちつともボンと変わりがないじゃありませんか。どうしてもこれはボンです。」と正雄はいいはりました。

「ボンは後足に傷痕があつたはずだから、そんなら調べてみればわかるでしょう。」
と、姉さんはいいました。

正雄は、犬を抱くようにして、その犬の後足を調べていましたが、急に大きな声をたてて、

「これ、こんなに後足に傷痕があります。」と叫びました。お母さんも、姉さんも、みんなそばにきて、それを見て、びっくりしました。

「まあ、どうしてボンが生きかえってきたろう……。」「
と、不思議がりました。

とにかく、ボンが帰ってきたのだというので、肉をやったり、ご飯をやったり、お菓子を やったり、ボンが好きであったものを やったりして、家じゅうは急にぎやかになったのでありました。そうして、正雄は、また明日から朝早く起きていっしょに散歩をし、学校から帰つてきてもいっしょに散歩することのできるのを喜んだのであります。

するとその日の晩方のことでありました。白いひげの生えたおじいさんが戸口に入つてきて、

「あ、ここに家の犬がきていたか。さあ、こい、こい。」と行って、ボンを呼びました。

しますと、いままで、正雄のそばに喜んでいた犬が急に立って、おじいさんのほうへ走ってゆきました。正雄は驚いて、

「あ、この犬は僕の家の犬ですよ。連れていつてはいけません。」と、正雄はおじいさんに向かつていいました。

「はははは、この犬は私の家の犬じゃ、それは坊の思い違いじゃ、これこのとおり、私についてくるじゃないか。」と、おじいさんは笑って答えました。

「いいえ、どうしてもそれは僕の家の犬ですから、連れていつてはいけません。」と、正雄は、あくまでもいいはりました。

「ははは、困った坊だ。」と、おじいさんは笑っていました。

そのとき、お母さんは出てこられて、正雄に向かい、

「家のボンは、このあいだ死んだのじゃないか。やはりこの犬は、おじいさんの家のですよ。そんな聞き分けのないことをいうものでない。」と、しかられました。正雄も、なるほどと思いました。

「私は、何町、何番地のだれというものじゃ。今度の日曜にでも坊は遊びにおいで。」と、おじいさんは立ち去るときにいいました。そうして、つえをついて門口を出ま

すと、ボンはおじいさんの後あとについて、さつきと行ってしまったのであります。みんなは不思議ふしぎに思おもつて、その後ろ姿うしすがたを見送みおくりました。

三

正雄まさおは姉ねえさんといつしよに、おじいさんの家うちへたずねていつてみようと言はなひました。やがて日曜日にちようびになりました、その日の朝あさからよいお天気てんきでありましたから、正雄まさおは姉ねえさんと、おじいさんの家うちへ出でかけました。おじいさんの家うちは町の端はしになっていまして、その辺へんは圃はたけや、庭にわが広ひろうございまして、なんとなく田舎いなかへいったような趣おもむきがありました。おじいさんの家うちはちよつとわかりにくうございました。二人ふたりは番地ばんちを探さがして、あちらで聞き、こちらで聞きいたしました。そうして、やつとその家うちを探さがしあてることができたのです。

その家うちは珍めずらしいわら家やでありました。日の光ひかりがほこほこと暖あたたかそうに屋根やねの上うへに当たあつていました。鶏にわとが圃はたけで餌えを探さがして歩いていたり、ほどが地面じめんに降おりて群むらがって遊あそんでいたりしまして、まことにのどかな景色けしきでありました。

「まあ、ほんとうにいいところですよ。」と、姉さんは感心していいました。

「ボンはいるかしらん。」と、正雄はいつて口笛を吹いてみました。けれど、ボンはどこからも走つてきませんでした。どこかへ遊びにいつているのだらうと思つて、二人はその家の門を入りました。

ちようど日当たりのいい縁側に、おばあさんがすわつて、下を向いて、ふうふうと糸車をまわして糸を紡いでいました。二人は、その音を聞くと、たいへんに遠い田舎へでもいつているような気がしたのであります。おばあさんは耳がすこし遠いようでありました。で、二人の入つてきたのをすこしも知りませんでした。

「ここがおじいさんの家だろうか？」と、正雄は姉さんに向かつていいました。

「おばあさんにたずねてみましょう。」と、姉さんはいつて、おばあさんのそばへゆきましました。おばあさんははじめて、人のきたのに気がついたようすでありました。姉さんは、おじいさんの姓と名とをいつて、

「このお家でございますか。」と、おばあさんに聞きますと、おばあさんは、糸車をまわす手をやめて、つくづくと姉さんと正雄の顔をながめながら、

「おまえさんたちは、どこからおいでになりました。私は、ちつとも見覚えがないが。」

と、おばあさんは答えました。

そこで、二人は、先日おじいさんが犬を連れて帰ったことを、おばあさんによくわかるように子細に語りますと、おばあさんは、やはり、ふに落ちぬような顔つきをして、

「多分、それは家がちがいますよ、そんなはずがないから。」と、おばあさんはいいました。

「じゃ、同じ番地に、こういうおじいさんは住んでいませんか。」と、正雄は聞きますと、「そのおじいさんの家ならここです。その人は私の連れ合いです、もう一月ばかり前になくなりました。」と、おばあさんは答えました。二人は思わず顔を見合つて驚きました。

「どうしたのだろう。」と行って、大いに不思議がりました。よくおばあさんに聞いてみますと、ボンの死んだころと、おじいさんのなくなったころと同じでありました。また、先日正雄の家へやつてきたおじいさんと、死んだおじいさんとは、ようすがそっくり似ているのでありました。そのとき、おばあさんは、うなずきながら二人に向かつて、「わかりました。おじいさんは平常犬や猫や鳥が大好きであつたから、きっとその犬をつれて、いまごろは、極楽の路を歩いていなさるのだ。坊ちゃん、犬をかわいがつて

おやりだったから、きつと犬いぬがあの世よからたずねてきたのですよ。それをおじいさんが迎むかえにきて、また、連つれていったのです。」といました。

正雄まさおも姉ねえさんも、あるいはそうかと思おもいました。やがておばあさんに別わかれを告つげて帰かえる途みちすがら、二人ふたりはボンのことはなを話あし合あいました。ボンはこの世よに生いきていて、人にんじ情じやうのない人ひとたちにいじめられるよりか、かえつてあの世よにいつて、しんせつなおじいさんにかわいがられたほうが、どれほどしあわせであるかしれないと語かたり合あったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「おとぎの世界」

1919（大正8）年4月

※初出時の表題は「お爺さんの家」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年4月11日作成

2013年10月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おじいさんの家

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>